

## 第三十二話

# 堤が切れるぞ

## 半鐘の音

安政<sup>あんせい</sup>2(一八五五)年旧暦8月31日の午前のことでした。

昨日から重く垂れ下がった灰色の空には、低い雲の固まりが次々と北上し、ときどき大粒の雨が強くたたき始めておりました。

「のう、お父つつあん。ひどいお天気になりそうじゃないか……。」

「うん、たいしたことにならないが……。去年の11月は大地震でこの家もだいぶ壊れ、やっこの間住めるようになったばかりというに、今度は大風だ。あの地震の時は本当に

こわかった。ぎ・よ・う・さ・ん・家が倒れ、堤<sup>つとみ</sup>がくずれて、生きた心地<sup>こころち</sup>もなかった。お前さんはそっちへ出かけてしまい、わしらは揺れ返しの度に掘<sup>ほ</sup>立て小屋の柱にしがみついた。それでも、今年は暑さが続いて、この分だとうにかお米がとれそうだと喜んでつたに……、のう、なんかのたたりだろうか……。」

「何をいつまでもぶつくさ言つとるだや。このぶんだと、川の堤が切れるかもしれぬ。とにかく、子供たちを鎮守さまへ逃がせるよう支度しといた方がええぞ。」

息をつくように間をおいてはきしみ出した雨戸にたたきつける雨の音で、宮津村の与作<sup>よさく</sup>さは、女房へどなるような声で言いました。

「……のう、お父つつあん。……半鐘が鳴つとらせんかえ。」

「……うん、鳴つとるな。とうとう堤<sup>あぶ</sup>が危なくなつたらしい。あれは、集まれの合図だ。わしは出かけて行かなくちゃあならん。おまえ、



こんど半鐘が鳴ったら、子供たちを連れて逃げるだぞ。」

与作さは、固まり合っている子供たちと、すがりつくような女房へ、ちらと目をやってから、口をへの字に結んで、手早く蓑・笠みの・笠かさで身を固め、二、三度足踏みしてワラジの具合を確かめたあと、ガタビシの雨戸をこじあけて飛び出していきました。

——それから、どのくらい時間がたったことでしょうか。横なぐりに吹きつける雨と風の中を、堤防のあちこちで、声をかけ合いながら杭くいを打ち俵を必死に積む人々の姿が右往左往していました——。

「おおい、水に吞まれんように気いつけてやるだぞ。……ここへもつと土俵を持ってきてくれ……。」

「のう、大体、川下のもんが勝手に川筋を東へ曲げたり、洲すの中を耕したりするから、堤が切れやすくなったんだ。おらあ、腹が立つ

てならねえ……。」

「今さら、それを言ってみたところで、どうにもなるもんでねえ。とにかく急がにやあならんぞ。」

「庄屋さまあ、もうあかんぜ。ほれ、見なせえ、水の色が黄色くなつてきた。この分<sup>ぶん</sup>じゃあ、白沢・福住で堤が切れたに違いねえ。」

「うむ、これはいかんな。だれかすぐ半鐘を鳴らしてきてくれ。みんな引き上げるぞ。堤を北に逃げてくれ。おまえとおまえは手分けしてみんなに知らせるんだ。鎮守の森も危ないから、もつと高みに女・子供を上げよと言つてな。みんな氣いつけて行くだぞ。」

庄屋の声は、強い風雨の中で悲鳴のように聞こえました。

## 樋門争い

これは、明治32（一八九九）年9月下旬のことです。二日ほど前から、阿久比谷の一带は

雷を伴う大雨に見舞われました。幸いに強い風はなかったので、家屋の倒壊はなかったものの、皆が心配していたとおり、阿久比川も、それに流れ込むいくつかの支流も、各所でズタズタに堤防が切れ、ここ植大地区の田も、すつぽりと銀灰色の泥水に覆れて、まるで巨大な池か海のようになっていました。

「おい、こんなことつてあるかい。このままじゃあ、水の中に漬かつとる稲は全滅だぞ。」  
「大体、<sup>いん</sup>杈<sup>いん</sup>がたった二つばかりで、あれだけの水がはけるわけがねえ。今まで何度も広げたいと申し入れても、<sup>やなべ</sup>岩滑<sup>やなべ</sup>や半田の連中がちつとも動いてくれねえから、こんなことに何度もなるんだ。」

植の部落の地藏堂の前には、夕方から大勢の人が集まっていました。かがり火の光に浮かびあがった人々は、てんでに<sup>くわ</sup>鋤<sup>くわ</sup>やスコップを引きつけ、一様に目をギラギラ光らせながら、立ったり座ったり、声高にしゃべり合っ

ています。

「おれたちは、このままじゃあ埒らちがあかんと、今朝十人ばかりで落田の切り込みの堤を切り開いて水を落とそうとしたんだが、岩滑の連中が駐在さを引つ張って来て、すぐやめると言うんだ。やめんとつかまえてしまおうと言うから、仕方がねえ、みんな逃げたんだが、源げんさだけが文句を言つとつて、つかまつちまつた。」

「おれは村役をやっているからということでは半田の警察へ昼からもらいさげに行つたんだが、どうしても許してくれねえ。」

「おれもついて行つたんだが、警察じゃあ、おまゑたちが困つとることは分からんじやあないが、勝手に堤を壊すのは、お上かみの法に触れると言うんだ……。」

「岩滑や半田と話し合つて、その上で警察の許しを受ける届けを出せて……。」

「昔、勝手に川を東に曲げといて、水をこつ

ちへ落とすなと言ひ張つとるあの連中が承知するわけがあるもんか。」

「おいおい、そんなことを言い合っている中に田んぼは全滅だぞ。警察が向こうについていようがいまいが、とにかく今水を落とさなんだら、取り返しがつかんことになるぞ。」

「このままじゃあ、今年は一粒もお米がいただけなくなるぞ。」

「おい、構うことはねえ。今からみんな出かけて、堤に穴をあけてしまおうじゃあねえか。」

「そうだ、そうだ。悪いのは向こうだ……。」  
今まで何度も腹に据すえかねる思いをしてきた人々です。隣の大古根、高岡、矢口、椋岡ひえから稗ひえの宮みやの人まで続々と応援に駆けつけてきます。とうとう大変なことになってしまいました。

夜の十時ごろだったでしょうか。人々は差し入れの四斗樽で氣勢をあげると、二手に分

かれて矢勝川の堤防へ向かいます——。

「おい、あれ見ろ。高田橋から堤防へかけて  
えらい人だかりのようだぞ。」

「あ、あの提燈は半田の警察だぞ。」

「おい、こつちのは岩滑の消防と書いてある。  
それから、向こうのは半田と乙川の消防のよ  
うだ。」

「畜生め、どうしても堤を切らせんつもりだ  
な。ええ、いまましい。」

「とにかく、掛け合ってみようじゃないか。」

「掛け合っても、聞くような相手か。」

「向こうが向こうなら、こつちも考えがある  
ぞ。」

にらみ合いは、長くは続きませんでした。  
次第に興奮した人々は、どなり合い、こづき  
合い、つかみ合い、とうとう鳶口や鋏が振り  
回され、鳶口で大古根の榊原勝太郎さんが頭  
に大けがするに及んで、双方に殺気がみなぎ



り始めました。

これは大変なことになる——ここに至って警察も役員たちも、事の重大さに気づきました。

阿久比の農民たちは、役員 of 必死の制止に歯ごしりをしながら後退をせざるを得ませんでした。その後、役員 of 交渉があつて、浜田橋のかかりで阿久比川へ排水することに決着し、水は次第に引き始めたのですが、その年の稲はすっかり腐敗してしまい、人々はぼうぜんと眺め立ちつくすばかりでした。

さて、こうした騒動が契機になつて、その翌年には、当時としては最新のセメントを使った阿久比樋門が建設され、完工祝賀式が蓮慶寺の前に棧敷を組んで開かれ、花火大会に人々は興じ合いました。この工事を請け負つたのは、三河の服部長七という人だつたそうです。

この樋門は、現在は取り壊され、サイフォンに改修されています。

### 阿久比の主な災害(江戸時代)

一七〇〇〜一八五〇の百五十年間分	
元禄14	暴風雨・堤防決壊
同 16	大地震・倒壊家屋多数
宝永3	夜大地震
同 4	暴風雨・昼大地震(西浦の被害甚大)
同 5	11月から五十日間、雪が降り続く
享保2	雨長く降らず稲枯れる
同 3	大地震・飢饉
同 7	暴風雨・飢饉
同 8	三日間暴風雨・作物の被害甚大
同 11	矢勝川決壊
同 13	阿久比川各所で決壊
元文3	同右
宝暦7	十日間雨が降り続く
安永1	阿久比川各所で決壊・大洪水
天明3	暴風雨被害甚大・翌年大飢饉
同 6	降雨多く稲稔らず・翌年大飢饉
寛政3	暴風雨・家屋倒壊多数
文政2	大地震・同右
天保7	暴風雨・阿久比川決壊・大飢饉
弘化2	同
嘉永3	同・倒壊家屋多数

### 第三十三話

## 半蔵の発心

近ごろは、バスやハイヤーで訪れる人が多くなったのですが、自動車が少ない時代には、菜の花畑の道を、金剛杖に白衣、同行二人と書かれた菅笠の人々の長い列が続いたものでした。

「南無大師遍照金剛」と唱え、「ありがたや、高野の山の岩かげに……」と歌う御詠歌のコーラスが、のどかな風に乗って阿久比谷を流れました。知多新四国八十八か所霊場巡拝の順礼です。

この新四国八十八か所を開いた人は、当町福住の人です。

今から約百七十年ほど前のことでした。

「半蔵さ、悪かったのう、一時に嫁さと子を亡くしてしまつて……。」

「ああ、長いことに恵まれなくて、待ちこがれておつたに、かかも子も、いっしょに死んじまうとは……。」

福住の半蔵さんは、よくよく幸せの薄い星の下に生まれたものだと思いました。欲も得もなくして、荒古の阿弥陀堂に涙のお籠りをする日が続きました。見かねた庄屋の義平さんは、そんなの一つ所に伏せ籠つておつては命を失つてしまふ。妻子の菩提を弔うために各地の寺々へお参りに出かけてはどうかとすすめてくれました。

半蔵さんは菅笠・白衣に笈摺姿で、全国順礼の旅に出ました。六十六か国に書写した法華経を納めるためです。もちろん、四国の八十八か所も巡拝しました。

回国をしてみても、半蔵さんは弘法大師のありがたさをつくづく感じました。四国での一

月以上かかる順礼のできる人は幸せだが、足の弱い老人や女のためには、知多で順礼できるようにしてあげねばならぬ……、そう考えた半蔵さんは、南から北へ、半島の寺めぐりを始めました。

古布の誓海寺というお寺へお参りしたとき、ちようど住職の慧等和尚さんは庄屋の横井嘉右衛門さんと四方山話に興じていましたので、半蔵さんも庫裏へ招じ上げられ、座談の仲間入りをしました。和尚さんも庄屋さんも、半蔵さんの念願を聞いて、できる限りの応援をしてあげようと言ってくれたので、半蔵さんはうれし涙にむせび、しばらく厄介になることにしました。

山海の岩屋寺では、大同3年、弘法大師がこの寺の奥の院で百日の護摩を修行されたと聞いて、どうしても知多に八十八か所霊場を開こうと決意を新たにし、一層寺めぐりに精を出しました。

文政2年、半蔵さんは古見の妙楽寺の山門をくぐりました。すると、この寺の住職らしい大柄なお坊さんが、にこにこしながら合掌をして出迎えているのです。

「これはこれは、よくおいでくださいました。お待ち申しておった。さ、どうぞお上がり……。」

半蔵さんは、きよとんとして、しばらくは口がきけません。とにかく言われるままに客殿へ通ります。

出迎えてくれた妙楽寺の十三世亮山阿闍梨が申します。

「びっくりなさったろうが、これには訳がござる。ま、一通りお聞きください……。」

亮山さまは今から十三年前にこの寺の住職となりました。宗祖弘法大師に対する信仰が厚く、常に南無大師遍照金剛と唱えながら厳しい修行に励んでおりました。

文化6年3月18日の夜のこと、寝ている亮山さんの枕もとに弘法大師がお立ちになりま





した。

「この知多の地は、わしに宿縁しゆくゑんの深い所である。ここに札所を開いて、わしと縁を結ばせる仕事をおまえに任せよう。なお、おまえの協力者として、二人の浄行者をつかわしてやるぞ……。」

夢から覚めた亮山さんは、枕もとに一握りの砂が盛られていることに気づきました。これは、高野こうやの霊土に違いない。大師様がおいでくださったのだ。——亮山さんは知多に新四国の札所霊場を八十八か所開いてもらおうと決心し、そのお加護かごを祈って、本四国へ三度も巡拝に出かけました。

「昨晚、お大師様が再び夢枕に立たれまして、あれから十年、おまえの固い心がよく分かった。あす、この寺へ参る者が、そなたの協力者の一人じゃ——と申されましたのう……。」

亮山さんの話を聞いた半蔵さんは感激しま

した。自分の志を遂げ、自分の余生を捧げる  
お方が目の前におられる。二人の手ががっし  
りと握り合わされました。

二年後、讃岐の武田安兵衛さんが仲間に加  
わり、三人は札所開設のため東奔西走しまし  
た。札所になってもうお寺と部落に承知し  
てもらわなければなりません。弘法大師のお  
木像を百体近くも造らねばなりません。

半蔵さんは、そのため、福住の家屋敷・田  
畑をすっかり売り払って、その資金を作りま  
した。

文政6年春のことです。——亮山さまが先  
頭に立ち、お大師様のお木像を背に乗せた馬  
の口を半蔵さんが執り、そして本四国霊場の  
お砂を負う安兵衛さんが続く一行が、土地の  
人々の合掌に迎えられて、札所となる寺々へ  
向かいました。大事業を成し遂げた半蔵さん  
は、その翌年古布の誓海寺で大勢の人に見と  
られながら永眠しました。七十三歳でした。

### 知多新四国弘法参り



知多新四国八十八  
か所霊場は、文政7  
(一八一四)年3月に  
開創され、初めは準  
四国と呼ばれていた。  
豊明市の曹源寺をふ  
り出しに、知多半島

の東海岸を南下し、篠島・日簡賀島へ船で渡り、  
西海岸を北上して、大府の円通寺で終わっている。  
四国霊場の寺々が真言宗一派であるのに対し、  
知多のは浄土真宗・日蓮宗を除く各宗派に  
わたっている。

新四国開創に重要な役割りを果たした福住村の  
岡戸半蔵は宝暦2年の生まれで、美浜町善切の  
誓海寺には、かれの墓と、かれが建立した大乗  
妙典六十八部供養塔がある。

なお、かれが参籠した荒古の阿弥陀堂に地元  
の人々の手でかれの木像が安置されたが、現在は  
福住の興昌寺の境内に移され、ゆかりの馬の  
あぶみも保管されている。当町内の札所は、十  
三番板山安楽寺、十四番福住興昌寺、十五番坂  
部洞雲院、十六番椋岡平泉寺、十七番矢高観音  
寺である。

### 第三十四話

## 草木庵の主人

文政9年の秋のことでした。

「九臯どのはご在宅かの……。」

「おお、これは久村の楚山どのか。遠いところをようおいでくださいました。ささ、まずはお掛けください。あ、これ、だれぞおすずぎを持つて来ぬか……。」

「いやいや、お構いくださいな。勝手知ったこの家ゆえ、自分で井戸端で洗ってまいりませうわい。」

「ははは。それではご随意に……。」

九臯と呼ばれた草木庵大巢は、草木村の豪農平井文右衛門の家に生まれ、熱田の高橋家へ養子に入って橘屋弥四郎と名のつて商業に

精を出したが、後継ぎが成人すると、さつさと隠居して、実家の近くに庵を構えて、阿久比谷の句友と歓談することを楽しみとする風流な日々を送っていました。

今日訪れたのは久村の内藤伝兵衛で、かれは一樹庵楚山と号し、互いに無二の句友と、数日もおかずに行き来する間柄なのです。

いっぶくの茶をうまそうに喫し終わると、楚山は例によつて気さくに語りかけます。

「明春は、塊翁さまの師、暁台宗匠の三十五回忌になりますなあ……。」

「さよう、時の過ぐるは速いものでござる。わしも、板山の旭鳥、福住の真玉、横松の国水・山月、坂部の梅士たちに村の柳風も加えて追善句会をにぎやかに興行したいと思っている。そなたさまにはぜひ点者としてご臨席を乞いたいものじゃ。すでに題を『あら礎』と決めておりますよ。」

「ほう、『あら礎』とのう……、これはまた一

段と風雅な……。その日が待たれまするなあ。」  
「ところで楚山どの。そなたさまとは『鳥の道』をいっしょに編ませていただきましたが、お互いにこのような楽しい日々を送ることがができるのも、みな塊翁さまのご恩でござりまするなあ。」

「さよう、さよう。塊翁さまは土朗宗匠の直系で、尾張俳諧育ての親御様でござる。ことにこの阿久比谷はご出生の地ゆえ、ご門弟衆も多く、その盛んなこと、ご領内随一でござる。」

「先ごろ、店へ顔を出しました折り、ご挨拶にまかり出しましたが、殊のほかのお喜びで、いろいろと四方山のお話が出ました。」

「もう六十をいくつかお越えなされたと思うが、ご健固でおられましたか。」

「はい。お元気のようにはお見受けいたしました。が、今までになく思い出話が多く、この村をなつかしがられておられましたゆえ、なん

となく気になり申した。塊翁さまは、この村第一の名門の出で、ご城下へ出られてより大鶴庵竹有と号されて、暁台・土朗両宗匠の薫陶を受けられ、今は、江戸・大阪は申すに及



はず、北は奥州おうしゅうから南は九州まで、その句友の多いこと扶桑ふそうに並ぶ者なく、門弟数百とあがめられるお方だが……。」

「思い出話が多くなられたは、お歳としをとられたせいでござろう。いくらご自身が医師でも、寄る年波には勝てぬもの……。」

「おお、そういえば、お話の中で、そなたさまの噂うわさも出ましたわい。」

「ほう、わしがこととは……。」

「ほれ、そなたさまが『侘草紙わひそうし』に書かれた塊翁くわいおうさまのお言葉のことよ。」

「ああ、あれは『常のこと』を上梓じょうしなされた文化ぶんか9年の秋でござったが……。」

「そなたさまのお噂うわさから、『侘草紙わひそうし』に触れられて、こう申された。——あの中で楚山も書いてくれたが、わしがまだ草木におったころ、生家へ出入りする作男さくせこに助治郎すけじらうという老人がおった。その老農夫に、若いわしは、この世で楽らくとはどういふことかと尋ねてみた。

すると、助治郎が言うには、夏の暑い日盛りなつあつに体がたわむほどの重い荷を負って、あえぎつつ十丁ほど行ったところが、道端に程よい松の木影があり、見ればその傍なならに冷たく湧わきでる清水がある。これはありがたいと、荷を降ろして一息つく。これが本当の楽じゃぞいと申したが、今にして思えば、まことにありがたい教えであつた。

涼しさや皺しわになりたる足のみめ

の心を大切にいたさねばならぬ。額に汗することなく、楽隠居の日過ひあごしに句作するは、まことの歌詠みとは申されぬ。——と言われたゆえ、わしは、わがことと、身の縮む思いをいたしもうした。」

「は、は、は……。おまえさまばかりではござらぬわい。この楚山とて同じこと。とにかくこの教えは、皆の衆にもよく伝えておかねばなりませんなあ……。」

いつしか短く傾くようになった日ざしが、

明り障子に松の枝の尾を引いているのも知らず、心を許し合った老句友は話し続けたのでした。

### 阿久比の俳人



— 平井大巢墓 —

第十九話で触れたが、永禄10年富士見道記には「棕原という人」が登場し、寛文4年の「阿波平集」

には宮津の光政らの句がある。宮津の新海浮武は元禄3年北原天神奉納連歌千句を興行、当地に古くから連歌・俳諧にすぐれた人物が居住していたことが分かる。俳句は元禄期に松尾芭蕉が大成し、全国的に隆盛を見ることになるが、当地では、明和元年草木出生の竹内竹有が、暁台・士朗の薫陶を受けて、尾張五老の一に数えられたが、その門弟の中には、横松の花木、高岡の来静、矢口の露面、坂部の石虎、草木の岱山、卯之山の都暁らがいる。平井大巢もその高弟の一人で、老後生家に草木庵を構えて当地の俳人育成に尽力し、本話中に記した多くの門弟があった。竹有一大巢の影響で、その後当地は阿久比俳人として高い評価を受けることになった。

### 第三十五話

## 筆塚

文政のころのことです。今日は初午の日で、阿久比谷白沢村の人々は、一日仕事を休んで神詣でや寺参りなどを楽しんでおりました。

ここは白竜山宝安寺の庫裏の玄関口です。元禄以前にこの村には延命寺という大きな寺がありました。が、どんな都合があつたのか、大府へ引越してしまい、残った材で村人たちが建てたのが、この宝安寺なのです。

ようやく春の気配が漂い始め、寺の庭に咲く白梅の花のかすかな香りが、玄関口まで流れていました。

「おたのもうします。ご免くだされまし…。」七つか八つになったばかりと思われる男の子

を伴い、切りだめと重箱を下げた農夫が大声で奥へ案内を乞います。

「どうれ、……、おや、源兵衛さではないか。ようおいでたの。まあ、お入り。」

出てきたのは、白衣に略衣姿の当寺の住職道秀和尚です。

「へえ、ありがとうございます。先だってお願いに上がりましたが、これがせがれの源太でござります。仕様のないガキでござりますが、よろしゅうお頼みいたします。……これ、お師匠様、いや和尚様に早うご挨拶を申し上げますか。」

今日は洗いざらしだが紺縞の木綿の着物を着せられた子供は、緊張した様子で、ペコンと頭だけ下げます。

「このとおり、ご挨拶もようせんで……、どうかよろしゅうお願い申します。」

源兵衛は、ペコペコと何度も頭を下げ、それからそばで突っ立っている子供の頭を手でお

さえて、もう一度おじぎをさせました。

「心配せんでも、子供はじきに慣れるわな。そう言えば、この間の、坂部様へ月参りに上がったとき、おまえの姉ちやがお針子に來ると奥様が話しとられたが、今日からおまえも寺子だな。初めは「いろは」の手習いから入って、村づくし・国づくし、三年もたったら商売往來で珠算までやれるわい。まじめに勉強せんとあかんぞ。おまえの隣りの弥市や作次もみんな來とるから、何も心配することはないわ。どれ、みんなに引き合わせてやるかの。よろしゅう頼んますと頭を下げるのだぞ。」

「それでは、わしはこれでご無礼をいたしますが、これは和尚さまへの赤飯、これは寺子たちの分、水吞百姓のことで、これでお許しくださいまし。」

「おお、それはごたいげな。ありがたかったですぞ。」



源兵衛は、一人置いていくわが子が気になるのか、何度も何度も振り返りながら帰っていききました。

源太が寺子入りしてから二十日ほどたちました。今朝も二つ上の隣りの弥市が誘いにきます。

「源太やい、行くぞ。」

「おや、弥市ちゃ。いつも連れにきてくれて済まんのう。……あれつ、今日はえらい一張羅を着とるでねえか。」

「おぼはん、何言つとるだあ。今日は天神さんの日だぜ。」

「天神さんの日って、何のことだえ。源はんにも言わねえから、いつものまんまでやろうと思つとつたに……。」

「あのなあ、毎月25日は北原きたはらの天神さんの日で、みんなでお参りに行くんだ。だから今日は手習いはねえだよ。それから、古い筆が

あつたら持つていくだ。なけりや持つていかんでもいいと和尚さまは言つとらした。」

「あれまあ、わし、ちつとも知らなんだがい。これ、源、ちゃんと夕べ言つとかんといかんがな。……すぐ着替えさせるから、弥市ちゃ、ちよつと待つてやつておくれな。」

——宝安寺の道秀和尚に連れられた十数人の寺子たちが、お社やしろへの道をたどります。

木々の芽が銀色のふくらみを持ち、道端の風にそよぐ枯れ草の陰に薄い緑の軟かい草やすみれの花が顔をのぞかせています。子供たちはみんなでそろつて歩くのにワクワクしておしゃべりの果ては、言い合いになつたり追つ駆け合いになつたりして、「留め置きだぞ」と叱しかられながら、北原天神社の社頭へ到着します。

「このお社はな、この谷や村々を開かれた英比磨ひまろ様がお建てになられたありがたあい神さかみんじや。天神様というのは、菅原道真公すがはらみちざねとい





うお方で、学問にすぐれ、書のたいへんお上手なお方であった。それでの、天子様が神様として敬われたくらいだった。だから、手習いや学問をする者は、このお社へようお願いをせんと上達せぬのだぞ。

あ、それから、古い筆を持ってきた者は、あっちの筆塚へ持って行って、筆を納めたら、『筆さん、ありがとう』と何度も言っておよく拝むのだぞ。」

子供たちは、神妙な顔をして、こっくりこっくりとうなずきながら聞いていましたが、お参りが済んで寺へ帰ってから、年長者は、長い漢文を書かされるのはいやだなあと考え、年少者は、寺でお赤飯が出るからうれしいなあと顔をほころばせたり、中には、寺の天神様の掛け軸の前にどんなお菓子が供えられとったかななどと首をひねったりしていました。そんなみんなの上の初春の空を、トンビがゆったりと輪を描いておりました。



江戸時代の教育は、中級以上の武士のための藩校はんこうがあっただけで、その他のためには、寺院・神主・医師・浪人などの開く寺小屋という私塾があり、七、八歳以上の男の子が通った。入学は初午はつごの日で、子供は父兄に伴われ、机・文箱持参で出かけるのが恒例で、謝礼は、盆と喜れの二度、その分に応じて僅かな金品を差し出す程度だった。学習は毎日でなく、教える者の都合により、修業年限に決まりはなかった。学習内容は「読み・書き・珠算」で、最初は、いろはの習字から始まり、次第に、村・国づくしから百姓往来や商売往来で終わるのが一般的で、上級者には、書簡文・千字文・儒書などの学習が課せられた。珠算は加減乗除程度で、女の子は、十二、三歳になってから、富有の家の妻女や有識婦人に、しつけを兼ねて裁縫を習い、「お針子」と呼ばれた。



一筆塚

### 第三十六話

## ええじやないか

に迎えてくれました。

「はい、この暑いのに、ようおいでくださいましたねえ。」  
 私たちの訪問を快く受けてくださった八十八歳の老婦人は、大古根の薬師堂で、にこやかに

街道沿いの薬師堂の中は、八畳ほどもあるうかと思われる広さで、正面の壇上には、金色に輝く立派な宮殿が三つ並び、いろいろなお供物やお花が供えられて、この地区の人々の信仰心の深さが知られました。中央の宮殿内は左手に薬壺やくすいを持って立たれた薬師如来のご尊像で、その両側には二体の観音かんのん様をまじえた十二神将が並び、右側の宮殿内は木像のお地藏様、左側のは毘沙門様びしゃもんさまが祀られていま

した。昔は、薬師如来は蓮慶寺の後に、お地蔵様は八幡社の坂を上がった所にお堂があったのだそうです。

「私の家は、今は英比という、町ではたった一つの姓でございますが、昔は代々新美八兵衛を名のる大古根村の庄屋でございました。

お姑さまは、常滑からお嫁においでたのだそうです。よく昔のことを話してくれました。

庄屋ですから和紙に何やら書いたものがたくさんありましたが、おじいさまが花火が大好きで、みんな球の鉢巻きに使ってしまわれた

ということでした。ええ、昔は火薬の調合も打ち揚げも、全部村の衆でしたものだそうです。ございます。それで、これだけしか残っておりませぬが、よろしかったらご覧になってください。」

差し出された古い桐の箱には、古文書がいっぱい詰まっております、読んでいくうちに、

「新美八兵衛、安政4年12月、苗字帯刀を許

す」と書かれた代官所の差紙もありました。

「お姑さまに聞いた話なのですがね、庭の大

石はお代官様のお駕籠を置く石だったそうで、

今は沓脱ぎ石に使っておりますが、この間も

庭師さんが、これなら十何人も靴が置けると

びつくりしていましたよ。……はい、お正月

には、村中の人が全部お祝いにおいでたし、

お・こ・も・さ・んが大勢集まってきたので、屋敷の

外へ蓆を敷いて、お神酒やご馳走を出したも

ので、それはそれは、大変なにぎわいでした

いましたそうな……。」

古文書の中には、尾張藩主からのおほめの

言葉や、幕末に黒船を追い払うため海岸守裁

許役を命じるという書き付けもあって、この

老婦人の家柄の高さが分かります。

「私の家は神道でございます。そんなにかど

うかは分かりませんが、ご一新の前に神さん

のお札が降りましたそうな……。」

幕末のころ、知多半島の各地に、天照皇太



神と書かれた伊勢神宮の神札などがまかれま  
した。多くは富豪の家の前でしたが、村人た  
ちは「お札ふだが降った」とその家の前に集まり、

その家が出した酒を飲みご馳走を食べて、終  
日「ええじゃないか、ええじゃないか」と踊  
り歩いたといえます。老婦人の家が神道に  
なったのは、このお札が降ったことによるの  
かも知れません。

「神道の家の私が、このお堂のお守りをする  
ことになったのは、家が近いからでしょうか  
ね。毎日お掃除をさせていただいて、仲のよ  
い人たちと御詠歌を唱えたり、おしゃべりを  
したり、お茶をいただいたり、とても楽しくご  
ざいます。……ああ、そう言えば、このお薬  
師さんには、願がえをかけた人が納めていった物  
がありましてね、前に神主さんに見ていただ  
いたら、大切な物だからしっかりお守りなさ  
いと言われましたが……」

丁重ていじゆうに持ち出された小さな木箱の釘打ちさ  
れた蓋ふたには「奉書写大乘妙典」裏には「文化  
十三年丙子冬十月八日、大塚三益菅原文斐敬  
白」と墨書され、箱の中には、法華経全巻を

ぎつしりと書き込んだ気の遠くなるほど長い  
薄い和紙の巻紙が納められ、その巻末に「文  
化十三年丙子冬十月十有四日、奉書写経為諸  
重罪五逆消滅懺悔清浄心不可思議因縁現世報  
恩、奉納詣尾張国愛知郡醍醐峯邑医王殿記」  
と奥書きされており、もとのように巻き戻す  
のに三十分以上もかかったほどでした。

これは明らかに六十六部（単に六部とも言  
う）の納経です。心願のことがあって、日本  
全国を巡り、一国で一か所法華経を納めてい  
く大変な修行です。

奥書きの愛知郡醍醐峯邑という村はありま  
せんから、愛知は知多の間違いで、知多郡大  
古根村ということなのでしょう。この大塚三  
益という人はどんな事情があつて六部になつ  
たのでしょうか。きつと想像を絶する苦しみ  
にあつたか、辛いわけがあつたのでしょうか。

私たちが老婦人に見送られて帰ろうとした  
とき、カブに乗った人が立ち寄られてこう言

われしました。

「この仏様はありがたいお方ですよ。おかげ  
で事故には一度もあつていないですからね。」

### 幕末の農村



鎖国を続けていた

- 一 江戸幕府も、その末  
期になると外国船の  
堂 渡航・開港要求が激  
師 しくなり、文政8年  
薬 異国船打ち払い令を  
出、尾張藩も知多

半島を重視して海岸防備につとめることになり、  
当町の各村には、役人・人足の宿舎と手あて、  
運搬人足の抛出などが割り当てられた。本話の  
大古根村をはじめ、宮津・白沢・草木・卯之山  
の各村に關係文書が残っている。

この黒船騒動は、安政元年の和親条約の締結  
で終わりを告げるが、その後、公武合体・長州  
征伐を経て、急速に明治維新へ移行すること  
なる。農村でも、その影響を受け、地方国学者  
や神道信仰者を輩出し、本話「ええじゃないか」  
に見られる民衆行動が盛んになってくる。